

女子サッカーにおける競技継続の現状と課題

ー山梨県女子サッカー競技を中心にー

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 沼倉しおり

1. 研究背景

2011年、FIFA女子ワールドカップドイツ大会において、サッカー女子日本代表が優勝したことをきっかけに、日本では女子サッカーが注目され始めた。さらに、2021年9月には、女子サッカー・スポーツを通じて、夢や生き方の多様性にあふれ、一人ひとりが輝く社会の実現・発展に貢献するという理念の下、日本初となる女子プロサッカーリーグである、WEリーグが開幕した(公益社団法人日本女子プロサッカーリーグ、online)。公益財団法人日本サッカー協会(online)(以下、JFA)は、2014年に、女子サッカー発展のためのプランであるなでしこ vision を定め、サッカーを女性の身近なスポーツにすることを掲げている。その中で、2030年までに登録女子プレーヤーを20万人にするという明確な目標を掲げている。JFAは、日本における女子選手の現状について、世界のトップ10の国々と比較しても、日本の女子選手は人口比が低いことや、2011年FIFA女子ワールドカップ優勝を契機に登録者数は増加傾向にあったが、2014年頃から頭打ちとなっていることを指摘しており、5万人前後を推移している。

出村ら(2008)は、都道府県別にサッカーの普及状況を各都道府県の総人口、選手数、チーム数、審判員及び上級審判員の人数のデータから調査した結果、サッカーの普及状況は各都道府県で異なることを明らかにした。また、稲葉ら(2017)は、女子サッカー競技の普及における主要な課題として、チーム数や地域による偏りを背景に、中学以降も競技を続けること自体が容易ではないことを挙げている。これらのことから、サッカー競技の普及には、地域性が関与していると考えられる。そこで、本研究は、小学生

と中学生を中心に、女子サッカー競技の普及のための手立てとなるよう、山梨県の女子サッカーの実態を調査することで山梨県における女子サッカーの現状を把握し、課題を明らかにすることを目的とした。

2. 研究概要と結果及び考察

山梨県の現状把握と課題を明らかにするため、本研究では、女子サッカー競技人口の調査と、女子サッカーの競技者及び指導者を対象としたインタビュー調査の2つの方法を基に調査を行った。

(1)女子サッカー登録者数の推移

山梨県の女子サッカー競技人口を調査するにあたり、一般社団法人山梨県サッカー協会に協力をいただき、データを収集した。本研究において扱う競技人口は、JFAに選手登録をしている選手数としている(以下、登録者数)。さらに、山梨県特有の課題を見つけるため、公益社団法人群馬県サッカー協会と公益財団法人埼玉県サッカー協会に協力をいただき、各県の女子サッカー登録者数を得た。そして、各県のサッカー協会から得られた登録者数と、学校基本調査(文部科学省)の都道府県別児童生徒数から得られた女子児童生徒数人口から、各県の登録者の割合を算出した。

①山梨県について

2010年度から2023年度11月時点における、山梨県の小・中学生女子サッカー登録者数について、表1に内訳と女子小学生人口・女子中学生人口に対する登録者の割合をまとめ、図1のグラフに、登録者割合の推移を示した。小学生についてのデータを見ると、年々人口が減少している中、登録者の実数値は増加傾向にあっ

た.中学生については,登録者の実数値は小学生に比べ増加は緩やかであるものの,人口比にすると増加している.しかし,2018年度から,小学生の割合より中学生の割合が低くなっている.このことから,中学進学時に競技を継続する選手が少ない,中学からサッカー競技を始める女子生徒が少ない,2018年度から小学生登録者の割合が大きく増加したことにより中学生登録者の割合が下回ってしまったという3つの可能性が考えられる.

表1 山梨県の女子サッカー登録者割合

	女子小学生			女子中学生		
	人口[a]	登録者数[b]	割合(%) [b/a×100]	人口[c]	登録者数[d]	割合(%) [d/c×100]
2010年度	23,398	92	0.393	12,830	51	0.398
2011年度	23,031	91	0.395	12,410	49	0.395
2012年度	22,334	86	0.385	12,235	51	0.417
2013年度	21,963	124	0.565	11,969	58	0.485
2014年度	21,465	137	0.638	11,916	64	0.537
2015年度	21,147	105	0.497	11,507	72	0.626
2016年度	20,759	89	0.429	11,222	87	0.775
2017年度	20,380	105	0.515	10,913	91	0.834
2018年度	19,989	164	0.820	10,658	79	0.741
2019年度	19,570	206	1.053	10,560	78	0.739
2020年度	19,216	169	0.879	10,403	88	0.846
2021年度	18,835	190	1.009	10,337	85	0.822
2022年度	18,675	171	0.916	10,021	88	0.878
2023年度	18,430	164	0.890	9,834	71	0.722



図2 山梨県女子サッカー登録者割合の推移
②群馬県について

表2と図2に群馬県のデータを示した.登録者数,割合が共に増加傾向にある.また,小学生登録者に比べ,中学生登録者の割合が高い傾向にある.しかし,このデータから,中学から競技を始める競技者の存在と,小学校卒業後に中学校でも競技を継続している登録者の存在のどちらの影響が大きいのかを明らかにすることはできなかった.

表2 群馬県の女子サッカー登録者割合

	女子小学生			女子中学生		
	人口[a]	登録者数[b]	割合 [b/a×100]	人口[c]	登録者数[d]	割合 [d/c×100]
2011年度	55,805	241	0.432	28,814	138	0.479
2012年度	54,638	290	0.531	28,399	150	0.528
2013年度	53,669	298	0.555	28,327	176	0.621
2014年度	52,506	311	0.592	28,168	175	0.621
2015年度	51,655	305	0.590	27,872	170	0.610
2016年度	50,653	325	0.642	27,369	169	0.617
2017年度	49,809	321	0.644	26,559	163	0.614
2018年度	49,250	315	0.640	25,687	183	0.712
2019年度	48,203	306	0.635	25,350	197	0.777
2020年度	47,244	324	0.686	24,965	179	0.717
2021年度	45952	329	0.716	24831	192	0.773
2022年度	45180	322	0.713	24144	226	0.936
2023年度	44129	321	0.727	23750	232	0.977

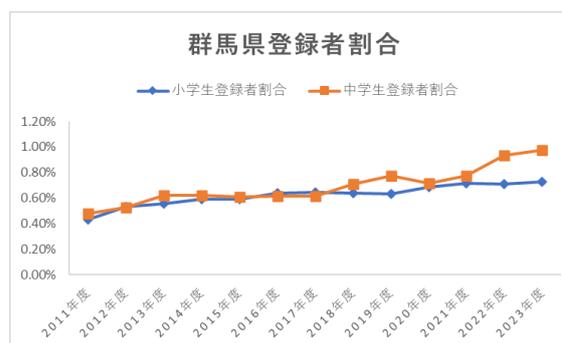


図2 群馬県女子サッカー登録者割合の推移
③埼玉県について

表3と図3に,埼玉県のデータを示した.埼玉県は,どの年度においても小学生より中学生の登録者割合が高くなっている.埼玉には,WEリーグ加盟の12チームのうち,3チームが拠点を置いている.また,2022年度時点で女子の中学クラブチーム数が17チームある.女子プロサッカーチームがあることや,女子のクラブチームが多数あることと,中学生登録者の割合との関連性については今後検討していくべきであろう.

表3 埼玉県の女子サッカー登録者割合

	女子小学生			女子中学生		
	人口[a]	登録者数[b]	割合(%) [b/a×100]	人口[c]	登録者数[d]	割合(%) [d/c×100]
2013年度	186,229	987	0.530	94,887	571	0.602
2014年度	184,884	957	0.518	94,751	619	0.653
2015年度	183,933	954	0.519	94,229	645	0.685
2016年度	183,134	1123	0.613	93,520	686	0.734
2017年度	182,533	1168	0.640	92,248	633	0.686
2018年度	181,708	1122	0.617	90,920	694	0.763
2019年度	180,378	1063	0.589	90,380	747	0.827
2020年度	179,117	1009	0.563	90,561	717	0.792
2021年度	177,437	980	0.552	91,002	742	0.815
2022年度	175,989	1030	0.585	90,648	719	0.793

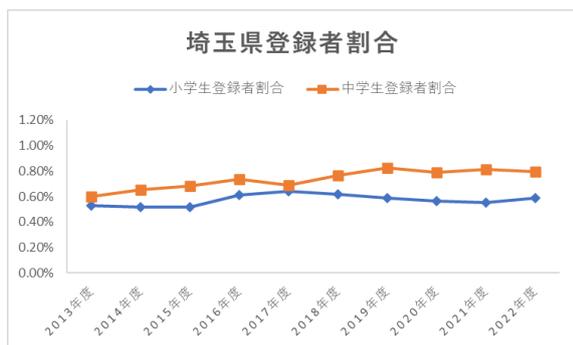


図3 埼玉県女子サッカー登録者割合の推移

④登録者割合の3県比較

山梨県,群馬県,埼玉県の3県における小学生登録者割合の推移を図5に,中学生登録者割合の推移を図6に示した.小学生登録者の割合に関して,山梨県は,他の2県に比べ,著しい増加傾向にある.さらに,2018年度以降,高い割合を示している.中学生登録者の割合については,大きな差は見られなかった.

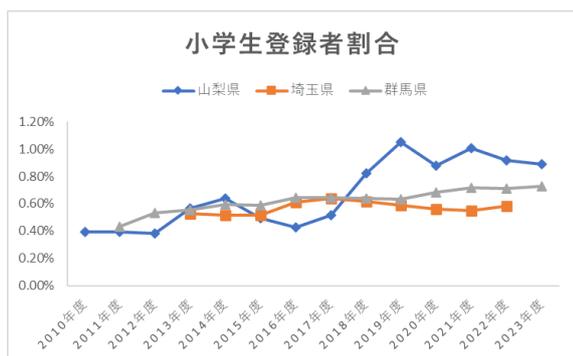


図4 小学生登録者割合の3県比較

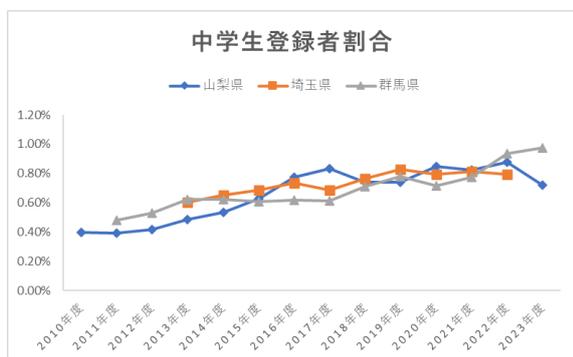


図5 中学生登録者割合の3県比較

山梨県の現状として,女子サッカー登録者数は増加傾向にあることが明らかとなった.一方,課題として,中学進学時に競技を継続する選手が少ない可能性と,中学生から競技を始める女

子生徒が少ない可能性が挙げられた.今後は,小学生登録者の割合が増加した要因を探ることに加え,他県との違いを明らかにするなどして,登録者数とは異なる観点からも山梨県の課題をより明確にしていく必要がある.

(2)女子サッカー競技者を対象としたインタビュー調査

女子サッカーにおける競技継続の実態を調査するため,大学生の女子サッカー競技者を対象にインタビューを行った.対象者は,サッカー競技を始めてから現在まで,山梨県内のチームに所属し,競技に継続的に取り組んでいるAさん(大学3年生)とBさん(大学2年生)の2名および,他県出身で現在は山梨県内の大学女子サッカー部に所属しているCさん(大学3年生)の計3名とした.インタビューは,図6に示した質問項目を基に,半構造化インタビューを行った.質問内容は,稲葉ら(2017)の研究を基に,本研究の目的に沿うように作成した.

- | | |
|------------|--|
| ①競技開始時について | <ul style="list-style-type: none"> サッカー競技を始めた時期はいつですか。 サッカー競技を始めたきっかけを教えてください。 |
| ②小学生時代について | <ul style="list-style-type: none"> どのチームに所属していましたか。 所属していたチームを選んだ理由を教えてください。 |
| ③中学生時代について | <ul style="list-style-type: none"> どのチームに所属していましたか。 所属していたチームを選んだ理由を教えてください。 |
| ④高校生時代について | <ul style="list-style-type: none"> どのチームに所属していましたか。 所属チームを選んだ理由を教えてください。 高校を選んだ理由を教えてください。 |
| ⑤現在について | <ul style="list-style-type: none"> 現在の所属チームを選んだ理由を教えてください。 現在通っている大学を選んだ理由を教えてください。 現在までサッカーを継続することができた理由は何だと思いますか。 |
| ⑥今後について | <ul style="list-style-type: none"> 大学卒業後は競技を続けますか。 |

図6 インタビュー質問項目

①競技開始時について

サッカー競技を始めた時期ときっかけについて,3人は以下の通り回答した.

A: きっかけはお兄ちゃん.幼稚園の時に,あの遊びのスクールみたいのに入ってた.本格的に始めたのは4年生の時から.

B: 5歳になる直前くらい.スクールみたいなところで最初に兄がやってて,スクールじゃなくて,もっと試合とかやりたいってなって,

兄が違うチームに移ったタイミングで一緒にそのチームに入ったみたいな感じです。

C: サッカー始めた時期は小学校2年生です。きっかけは、女の子の友達に誘われて始めました。その時あれだった、なでしこジャパンが優勝したときかな。

競技を始めた時期について、小学校入学前や、小学生で始めていた。また、サッカーを始めたきっかけについて、兄弟や友人という身近な人物の存在が影響していた。

②小学生時代について

小学生時代の所属チームと、所属先を選んだ理由について、3人は以下の通り回答した。

A: スポ少。

筆者: なんでそこにしたの?

A: そこしかできる環境がない。その時は知らなくて、そこでやるしかないと思ってたから。

B: クラブ。兄の影響で。

筆者: 兄の影響以外の理由はない?

B: まあ、ないって言ったらない。でも、続けられたのは、あのなでしこジャパンが優勝して、やりたいって思ったっていうのはある。

C: クラブチームで始めました。男子のクラブチームに女子のチームがちょっとついてて、ほんと何人かしかいないみたいな。

小学校年代では、地域のスポーツ少年団や、クラブチームに所属していた。

③中学生時代について

中学生時代の所属チームと、所属先を選んだ理由について、3人は以下の通り回答した。

A: 中学校から、〇〇(女子クラブチーム)に入った。

筆者: それはもうそこしかないと思ったから?

A: 小学校から〇〇(女子クラブチーム)あるんだけど、遠いから、お送り迎えができないって言われて。〇〇(女子クラブチーム)も週3とかだったから、部活はどうしようかみたいになって、結局、(中学校の)サッカー部入って、練習ない日はそっち行くみたいな。

B: サッカーは部活ですね。中学の部活入って、小5の時から続いている〇〇地区の女子チームに行ってたんだけど、別に人数いないから、活動してるけど小学生の男子と練習してるみたいな、そんなような感じ。中3になるときに、〇〇(女子クラブチーム)っていうチームがあって、自分のそのチームがそこと合体することになったんですよ。それで、その〇〇(女子クラブチーム)で中3の1年間は活動してたみたいな。

筆者: 部活はやめたということ?

B: いや、部活と並行して。〇〇(女子クラブチーム)の練習場所が。〇〇市とかだから、ほぼ練習は行けないみたいな感じです。

C: 中学校は、女子のクラブチームと、中学校の部活でやってた。

3名とも、中学年代では、女子のクラブチームと中学校の部活動の2つのチームに所属していた。Aさんのように、女子クラブチームをメインに活動している選手は、クラブチームの練習がない日には、部活動で中学校の生徒と練習をしていることが明らかになった。Bさんは、部活動をメインに活動しており、練習場所が遠くにある女子クラブチームには平日は通うことができないため、土日の試合がある日に参加することがあったと発言していた。

④高校生時代について

高校生時代の所属チームと、所属先を選んだ理由、進学先の高校を選んだ理由について、3人は以下の通り回答した。

A: Aが中学3年間も〇〇さん(県内にある大学女子サッカー部の指導者)に、女子トレセンでお世話になって、高校どうするのみたいに言われた時、正直、普通にみんなサッカー続けてたから、普通にサッカー続けたかったですよ。けど山梨でってなると、限られるじゃないですか。サッカーで生きていこうとも思ってなかったから、真剣に考えた時、サッカーを中心じゃなくてもいいなって思って、普通の高校に行きますっていう選択をした。それを〇〇さん(県内にある大学女子

サッカー部の指導者)に話したら、「それはなんかもったいない、ほんとにやめちゃうの。」みたいに言われて、でも、できる場所がないんでみたいな感じで言ったら、「え、うち来ればいいじゃん。高校と近いし、練習とかなら全然来ていいよ。県リーグなら登録すれば出れるよ。」って言われて。(山梨県内にある)〇〇大学もいっぱい人がいて、出れない子がいるわけじゃないですか。だから、試合にでられない子たちで、クラブチームを作ればそこで練習もできるし。そのチームができて、入れてもらったみたいな。

筆者：進路決定について親の反応はどうだった？

A：中から高に上がる時のサッカーをやることはめっちゃ反対された。将来サッカー選手になるわけでもないし、体弱かったから、ずっとその生活は絶対無理だよみたいな。しかも、寮なんて入ってなったらもう一生サッカーじゃないですか。その生活は無理だよ、みたいに最初はなった。高校生の時は、同級生が全国大会出るとかあって、マジでここ行けばよかったとか、自分に声かかった高校が全国大会出て、行けばよかったみたいのはあった。けど、今は別に何も後悔してないですね。

筆者：自由に好きなところに行っていていいですよって言われたら、県外に行ってた？山梨の高校に行ってた？

A：山梨はなかったね。そこで中途半端にやるんだったら、ほんとに県外行ってた。

B：サッカーは絶対続けたかったです。絶対に全国大会にも出たいって思って。公立で考えたら(山梨県内の)〇〇高校っていう選択肢もあるじゃないですか。でも、普通科がない。普通科で探したら私立かなって。

筆者：高校では部活でサッカーをやろうって決めていた？

B：部活でやろうって思いましたね。選手権に出たかった。

C：女子チームの監督が、(進学先の)高校と繋がってて、どうだ？みたいな話になって、強い

ところでやりたいって思って選びました。勧められて最初は迷ったんですけど。やるんだったら、じゃあ1番強いところでやろうっていう感じで。

筆者：高校は部活という選択肢しかなかった？

C：最初は勉強で(出身県の)公立高校とかも考えた。サッカーしたいって思ったので迷いましたが、部活にしようってなりました。

稲葉ら(2017)の、大学生217人を対象とした質問紙調査の結果、高校を選んだ理由として、「高校からの勧誘」や、「サッカー強豪校」といったサッカーに関わる理由が多く選ばれた。今回のインタビュー調査から、高校進学時には、BさんとCさんのように、高校の女子サッカー部に所属するために高校を選択して進学先を選んだ選手と、高校自体を主眼に置いて進学先を選んだ選手がいることがわかった。普通科で大学進学を見据え、サッカーでは全国大会を目指すという双方の理由から進学先を選んだBさんのような考えを持つ選手がいることもわかった。

⑤現在について

現在の所属チームと、所属先を選んだ理由、進学先の大学を選んだ理由について3人は以下の通り回答した。

A：自分の中に県外に行くっていう、考えがなくて、高校まで山梨にいたんだったら、出たいとも思わなかった。将来山梨で働くっていうのはもうずっと思ってたから。働くんだったら山梨にいた方が有利だし。近いし。

B：迷っててやりたいこととかも何にも決まっていなかった時に、〇〇さん(高校女子サッカー部時代のコーチであり、進学先の大学OG)との繋がり、教員とかどう？みたいな感じになって、いいのかなって思って。

C：大学は、サッカー辞める気持ちはなかったから、どっかでやりたいなって思ったけど、結構高校でやりきったって思ってたから、ほほどいいところでやりたいって感じで。

稲葉ら(2017)は,大学生女子サッカー競技者が大学を選んだ理由の違いについて,進路検討の時期におけるサッカー選手としてのレベルや将来性が関係している可能性を示唆している。このように,進学先を選んだ理由に関して,将来働くことを考慮し選択したAさんや,サッカーを自分のプレーしたいレベルを考慮したCさんの発言が得られた。また,Bさんの発言から,高校での所属チームを選んだCさんと同様に,指導者が進路選択に影響を与えることから,指導者の関わりは競技継続に関する重要な要素と考えられる。

(3)女子サッカー指導者を対象としたインタビュー調査

山梨県の女子サッカー指導者は,山梨県の女子サッカーの現状をどのように捉えているのかを調査するため,山梨県内にある小学生女子サッカークラブチームの監督をしているDさんを対象に,非構造化インタビューで調査を行った。また,Dさんは,普通科の高校に通いクラブチームに所属している女子サッカー競技者である娘を持つ保護者という立場でもある。

Dさんは,山梨県の女子サッカー登録者の現状について以下のように語った。

筆者：登録者数自体は増えているのですが,そう感じますか。

D：そう,登録自体はちょっとずつだけけど,増えているなっていうのはわかります。小学生年代は,増えているなっていうのは感じるけど,その次,中学に繋がらないっていうのは,もうずっと,長年のテーマ。絶対減っちゃうんですよね,そこでやめちゃう。続かない。

さらに,中学進学時に競技をやめてしまう理由について,女子クラブチーム環境を挙げた。

D：どうしても中学の部活をやらなきゃいけないって思ってた,部活やりながらサッカーもやればいいんだけど,部活を何かしなきゃいけないから,無理って言ってやめる子が多くて。中学の環境(女子チーム)もないっていうのもある。選べない,選択肢が少ない。男子と

中学の部活でやる子はいるけど,女子のチーム作ってよって言われるけど,いやいや,指導者誰やるの,会場ないじゃんとか,そういうのがずっとずっと長年の(課題)。なかなかそんな簡単にね。

また,育成年代である小・中学生のサッカー競技者の競技レベルや指導について,

D：確実に上を目指してる子は増えてると思います。県外の強い高校行きたいとか,やっぱなでしこの活躍もあって,なでしこ目指したいとかいう子も増えてるけど,楽しくやりたい子もいるから,そういう子たちが,やっぱどうしてもね,一緒にやらなきゃいけない。

筆者：選手がチームを選べると良いですよ。

D：そうそう。男の子は,強いチーム,クラブチームに行ってやりたい子,楽しくスポ少でやりたい子って選べるからいいけど,女子はなかなかそれが選べないから,どうしても同じチームでやるしかない。あと,年代も。低学年高学年で分けてやればね,メニューが設定できるけど,1年から6年とか言って。相当な差なのに一緒のメニュー。どっちもストレスだらうなって。そこをうまく工夫してやらなきゃいけない。

小学生年代の女子選手が男子選手と活動するサッカー環境について,

筆者：小学生時代,男子とプレーしていました。

D：ほんとは,女子のチームにいる子も,男子のチームにも行けばいいと思ってる。最近,(Dさんの指導先の小学生の中に)男子の中にちょっとやり始めてる子がいて,合同で試合とかやり始めたら,強さも出てきたし,速さも出てきたし,やっぱ違うなと思って。ほんとは,一緒に並行して小学年代はやればいいななんて思ってる。でも,絶対男の子の中ではやりたくないっていう子もいて。サッカーはすごいしたいし,試合もしたいけど,男子がいたら絶対やだっていう子もいて,そこは強制できないから希望者だけはそういう形をとってやっている。

D: でもずっと言ってることは、ずっと一緒に、山梨的には多分ずっと、中学どうする。ずっと言ってるような気がする。高校は、強化してるから、それもやっぱ県外から補強できるから、またちょっと別で、中学かなって思うんですけどね。

筆者: (女子サッカーチームがあるという)環境があれば続けますかね。

D: なんか今までもそういう人はいて、小学校から中学校に上がるのに、地域にチームがあればやるっていう。送り迎えとか、中学生だと近くにあれば自力で行けるけど、なければ親の送迎とか頼らなきゃいけないってね。でも、そこまでできるよって親とそうじゃない親がいるから、サッカーはやめちゃって、部活やればいいじゃんって言って、部活で違う競技をやる。違う競技やるのはすごい良いことで、また大人になって戻ってきてもいいかなと思ってるんだけど、もうちょっと中学に繋がればいいなって。

D: 最近、学校では、クラブチーム入ってたら、絶対に部活に入んなくてもいいよっていう感じになってきてるから、男子なんてね、クラブチーム入ってる子は、陸上部入って、走る強化だけは陸上部ですとか。部活もそんな選べるほどないし。そんなやりたくもないけど、内申悪くなるからって、しょうがないから入る。

今後の山梨県における女子サッカーの普及について、以下のように述べた。

D: 地道にやるしかないのかな。あと、指導者。若い指導者。

筆者: 確かに、若い指導者に出会わないです。やりたいって聞かないですよね。

D: だってほら、教育のことを目指したりしてる子たちですらそうだから。指導者の顔ぶれが全然変わらない。そうは言っても、(県内の大学女子サッカー一部の)若い子とかがいるけど、でもちょっと(競技の)レベルが違いすぎて(高い)、この子たち(小学生)とちょっと直

結しなくて、地域レベルの人たちが出てきてくれないと、おばちゃんはいつまでやるんだって、本当にそう思っちゃう。こういう趣味でやっていく子たちも大切にしたいなと思って、上のレベル目指してる子は多分ほっといても自分でやっていくはずだから。

筆者: トップレベル育てていくっていうのも大事ですよ。

D: それも大事。引き上げて、レベルを上げてなきゃいけないし。全部を上げて、下もいて、ここもいてっていうのが充実すれば1番。うちの子たちも、〇〇(県内の女子サッカー部がある高校)行きたいとか言ってる子もいるし。近くに目標となるものが今あるから、そういう強いところが身近にあるっていうのはめっちゃ大事で。

筆者: WE リーガーとかいたら変わりますか。

D: 変わってくると思う。あの人、元々プロの選手だったんだよとか言うと、子供たちの見る目違うし、そういうのは触れるのも大事だし。いくら上を目指さないと言っても、やっぱ上手くなれば絶対楽しいから。そうやって楽しんでほしいなっていうのがあります。

3.まとめ

山梨県の現状として、小学生、中学生ともに登録者数と人口比に対する登録者の割合は増加傾向にあった。また、Dさんのインタビューから、小学生競技者は現場で実感できる程の増加であると明らかになった。

課題として挙げられるのは、小学生年代から中学生年代に上がるタイミングで競技継続がされないことであろう。自分の競技レベルに合ったチームを選択できるようになれば、競技を続ける意欲を保つことができると考えられるが、そのために、活動できるチームと指導者の存在は必要不可欠であろう。また、JFA(online)は、近隣に女子チームがない、自分に合ったクラブチームがないなどの悩みを抱える女子選手にとって、中学校でサッカーを続けることを選択肢の一つとして挙げている。さらに、中学

年代の女子選手が増えれば、中学校の女子サッカー部ができるなど、より充実した環境が実現することも述べている。今後の学校部活動については、生徒にとって望ましいスポーツ環境を構築するという観点に立ち運動部活動が地域、学校、競技種等に応じた多様な形で最適に実施されることを目指すというスポーツ庁(online)の運動部活動の地域連携や地域スポーツクラブ活動移行に向けた環境の一体的な整備が進められていることを考慮しつつ、環境整備に取り組んでいく必要があると考えられる。さらに、指導者不足の解消といった、人材育成も進めていく必要があるだろう。

4.今後の展望

本研究は、山梨県内の全女子サッカー競技者および、全女子サッカー指導者の情報が得られていないため、山梨県全体の現状を把握するには至らなかった。また、登録者のデータから、競技を継続している登録者と中学年代から競技を始めている登録者の割合は明らかにできておらず、競技継続の現状を全て正確に把握できているとは言い難い。今後は、より詳しく現状を把握し、課題を明らかにする必要がある。本学女子蹴球部では、本学学生ではない大学生や社会人選手、高校生等を受け入れて活動を行っている。活動を行う場が少ない、あるいは場がない選手にとって活動の場となっている。さらに、選手が少ない本学女子蹴球部が人数を確保しながら活動できる。このように、両者にとって良い取り組みとなっている。今後はさらに、競技継続や普及のための具体的な取り組みを考えていかなければならない。

5.引用文献

- 出村友寛・出村慎一・松田繁樹・長澤吉則(2008) 都道府県別にみたサッカーの普及状況：選手数、チーム数、および審判員数に着目して。教育医学,53：4.
- 稲葉佳奈子・飯田義明・上向貫志(2017)高校・大学年代女子サッカー選手のキャリア形成に関する一考察.成蹊大学一般研究報

告,50：5.

- 公益社団法人日本女子プロサッカーリーグ. ABOUT WE：VISION/STRUCTURE. <https://weleague.jp/about/>(参照日 2024年1月23日).
- 公益財団法人日本サッカー協会.女子サッカー：女子サッカー発展のためのマスタープラン. https://www.jfa.jp/women/nadeshiko_vision/master_plan.html (参照日 2024年1月23日).
- 公益財団法人日本サッカー協会.女子サッカー：中学年代の女子選手の現状. <https://www.jfa.jp/women/womensfootball/day2022/img/leaflet.pdf> (参照日 2024年1月23日).
- 公益財団法人日本サッカー協会.データボックス：サッカー選手登録数. https://www.jfa.jp/about_jfa/organization/databox/player.html(参照日 2024年1月23日).
- 文部科学省.政府統計の総合窓口：学校基本調査(参照日 2024年1月23日).
- スポーツ庁.政策：学校体育・運動部活動,運動部活動の地域連携や地域スポーツクラブ活動移行に向けた環境の一体的な整備. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/1405720.htm(参照日 2024年1月23日).